



高松市立玉藻公園

史跡高松城跡

史跡高松城跡（玉藻公園）の沿革

高松城は、またの名を玉藻城と呼ばれていますが、その由来は万葉集で柿本人麿が讃岐の国の枕言葉に「玉藻よし」と詠んだことに因んで、このあたりの海が玉藻の浦と呼ばれていたことによるといわれています。

この城は、天正15年（1587年）に、豊臣秀吉から讃岐一国17万6千石を与えられ、国主として入府した生駒親正が、天正16年から香東郡野原庄（鏡原）と呼ばれていた現在地に築城に着手した平城（水城）です。縄張り（設計）は、当時築城の権威であった黒田孝高（如水）とも細川忠興ともいわれています。数年の歳月を費やして完成し、高松城と名づけました。瀬戸内の海水を外堀、中堀、内堀に引き込んだこの城は、日本の三大水城のひとつといわれています。城には、本丸を中心に時計廻りの方向に二の丸、三の丸、桜の馬場、西の丸が配され、三重の堀とともに堅固な構えとなっていました。

生駒氏の治世は4代54年間続きましたが、寛永17年（1640年）に生駒騒動といわれる御家騒動により、讃岐一国を召し上げられて、出羽国（秋田県）矢島1万石に移されました。このあと、寛永19年（1642年）に当時常陸国（茨城県）下館藩主だった松平頼重が東讃岐12万石の城主として入城しました。頼重は徳川家康の孫で、徳川光圀（水戸黄門）の兄にあたります。将軍家と近親の関係にあった頼重は中国・四国の監察役を命じられていたといわれています。頼重以降、松平氏の治世は11代228年間にわたり、高松は松平氏の居城として栄えました。

お城は、明治3年に廃城何を提出し許可され、一時、政府の所管となりましたが、明治23年（1890年）に城跡の一部が松平家に払い下げになり、昭和20年には松平家から公益財団法人松平公益会に継承され、さらに昭和29年に高松市が譲り受けて、高松市立玉藻公園として昭和30年5月5日から一般に開放しました。現在の玉藻公園の面積は79,587㎡（約2万4千坪）で、往時の城域66万㎡（約20万坪）と比べると8分の1ほどの広さです。城跡には重要文化財の月見櫓、水手御門、渡櫓や長櫓とともに石垣や堀などが残り、昭和30年3月2日に国の史跡に指定されています。また、高松城は彦根城と姉妹城縁組をしていますが、これは第11代藩主頼聰の奥方として、彦根藩主であった井伊直弼の次女千代姫が輿入れしている縁から、昭和41年に結ばれたものです。

歴代城主一覧表

氏名	世代	城主	襲封	治世	寿	墓所
生駒四代	初代	親正	天正15年8月 (1587年)	14年	78歳	弘憲寺 (市内錦町)
	2代	正正	慶長6年5月 (1601年)	8年	56歳	妙心寺 (京都市)
	3代	正俊	慶長15年3月 (1610年)	12年	36歳	法泉寺 (市内番町)
	4代	高俊	元和7年6月 (1621年)	19年	48歳	龍源寺 (秋田県矢島町)
松平十一代	初代	頼重	寛永19年2月 (1642年)	32年	74歳	法然寺 (市内仏生山町)
	2代	頼常	延宝元年2月 (1673年)	32年	53歳	靈芝寺 (志度町)
	3代	頼豊	宝永元年2月 (1704年)	32年	56歳	法然寺
	4代	頼桓	享保20年12月 (1735年)	5年	20歳	法然寺
	5代	頼恭	元文4年9月 (1739年)	33年	61歳	法然寺
	6代	頼眞	明和8年8月 (1771年)	10年	38歳	法然寺
	7代	頼起	安永9年4月 (1780年)	13年	46歳	法然寺
	8代	頼儀	寛政4年9月 (1792年)	30年	55歳	法然寺
	9代	頼恕	文政4年5月 (1821年)	22年	45歳	靈芝寺
	10代	頼胤	天保13年5月 (1842年)	20年	68歳	伝通院 (東京都)
	11代	頼聰	文久元年7月 (1861年)	11年	70歳	谷中(東京都) 法然寺

開園時間

	公園の開園時間	
	西門開門時間 日の出～日没	東門開門時間
4月～5月	5時30分～18時30分	7時～18時
6月～8月	5時30分～19時	
9月	5時30分～18時30分	
10月	6時～17時30分	
11月	6時30分～17時	8時30分～17時
12月～1月	7時～17時	
2月	7時～17時30分	
3月	6時30分～18時	

休園日 12月29日～12月31日

入園料

	普通	団体
大人（16歳以上）	200円	140円
小人（6歳以上 16歳未満）	100円	70円
団体は20人以上		

定期入園券

大人（16歳以上）	1,200円
小人（6歳以上 16歳未満）	600円
1年間有効	

総面積 79,587.44㎡

堀	22,608.00㎡
庭園	55,602.79㎡
駐車場（無料57台）	1,376.65㎡

年間行事

年始無料開放	1月1日～1月3日
春の植木市	3月上旬～4月上旬(予定)
桜見物夜間無料開放	4月上旬(予定)
一般開放記念無料開放	5月5日
菊花展	10月中旬～11月中旬

問い合わせ

〒760-0030 香川県高松市玉藻町2番1号
 玉藻公園管理事務所
 TEL 087-851-1521 FAX 087-823-6390
<http://www.tamamokoen.com>

園内のみどころ



① 旭橋と旭門

かつて、城の南側の桜の馬場の南中程に大手門がありました。寛文11年(1671年)頃、三の丸に藩主の住居である旧披雲閣が建てられたため、これを廃して新たに東に旭橋を架け、それを渡って旭門から出入りするようになりました。旭門に入ったところにある巨石を積み重ねてつくられた枳形は、攻め込んだ敵を包囲したり、攻め出すときに中に兵士を並べてその概数を知るためのものです。枳形の北面には埋門があり、南側には太鼓御門がありました。



② 長櫓(旧太鼓櫓跡)

[昭和25年8月29日重要文化財指定]
長櫓はもともと東の丸の北東の隅(現在の県民ホール敷地内)にあった櫓で、北東の方角を丑寅ということからこの名前があります。完成は延宝5年(1677年)頃といわれ、月見櫓と同時期につくられました。三層三階・入母屋造・本瓦葺で、形は月見櫓と似ていますが、初層に大きな千鳥破風があるのが特徴です。昭和40年に当時の所有者であった旧国鉄より高松市が譲り受けて、2ヶ年の歳月をかけて、東の丸より旧太鼓櫓跡に移築復元されました。



③ 桜の馬場

馬の教練をしたところで、かつては今の2倍ほどの広さがありました。現在は桜の木が植えられており、春は花見の人で賑わいます。



④ 桜御門跡

三ノ丸入口の櫓門(やぐらもん)で昭和20年(1945年)の高松空襲により焼失しました。石垣には火災により赤く焼けた痕跡や、地面に残る礎石には柱に使用された金具の錆跡が茶色く残り、往時の姿を偲ぶことができます。

⑤ 陳列館

高松城や歴代藩主等に関する文化財や資料、模型、古写真等を展示しています。国宝詩懐紙藤原佐理書(複製)高松城天守閣(複製)高松城・城下町模型、取壊し前の高松城天守閣写真を含む明治時代の高松城周辺を撮影した写真(平成17年、英国ケンブリッジ大学図書館)天守台発掘調査写真パネル等



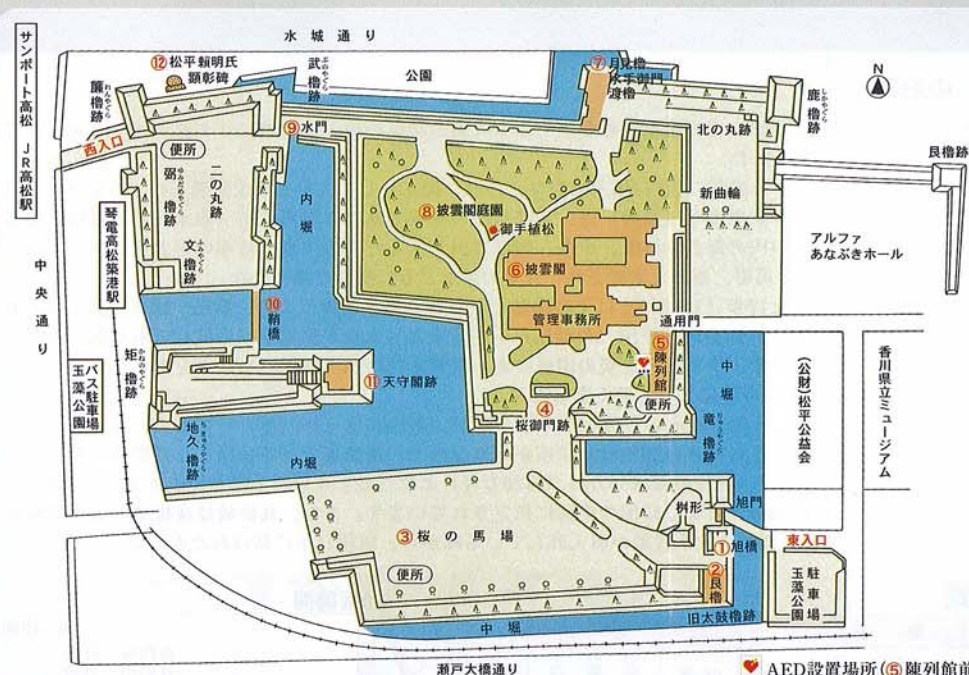
⑥ 披雲閣

[平成24年7月9日 重要文化財指定]
延床面積は1,887㎡。
松平藩時代にも現在の場所に披雲閣と呼ばれる広大な建物(現在の約2倍)がありました。藩の政庁及び藩主の住居として使われていたが、明治時代老朽化により取り壊され、その後、3ヶ年の歳月と当時のお金で15万余円の巨費を投じて、大正6年(1917年)現在の披雲閣が完成しました。披雲閣の建物のなかには142畳敷の大書院をはじめ、櫓の間、松の間、鉄鉄の間など雅致を生かした各部屋があり、波



⑦ 月見櫓・水手御門・渡櫓

[昭和25年8月29日重要文化財指定]
月見櫓は北の丸の隅櫓として延宝4年(1676年)頃に完成したといわれ、出入りする船を監視する役割を持つとともに、藩主が江戸から船で帰られるのをこの櫓から望み見たので[着見櫓]ともいわれています。総塗籠造りの三層三階・入母屋造・本瓦葺で、初層は千鳥破風、二層は唐破風と屋根の形を対象させて、また各層の白壁に上下二本の黒塗長押を巡らして変化を持たしています。
月見櫓に連なる薬医門様式の水手御門は、いわば海の手門です。



の間には、昭和天皇・皇后両陛下が宿泊されました。第2次世界大戦後しばらく占領軍に接収されていましたが、高松市が譲り受けてからは、貸会場として会議、茶会、華展などに利用され、市民に親しまれています。

⑧ 天守閣跡

生駒氏時代の天守は、絵図や古文書によると3層だったとされています。松平氏時代の寛文10年(1670年)に改築された天守は3層5階(3層4階+地下1階)の唐造りで四国最大の規模を誇っていましたが、明治17年(1884年)老朽化を理由に取り壊されました。平成17年から天守台修復工事が行われ、発掘調査の結果地下1階部分から58個の礎石が当時のまま現れました。平成25年修復工事も完了し、今後天守閣復元に期待がかかっています。



⑧ 披雲閣庭園

[平成25年1月7日 市指定名勝]
この庭は披雲閣の再建にあわせて、大正6年(1917年)頃作られた枯山水の庭で、江戸時代の三尊石や重さ11トンといわれる水鉢、後の昭和天皇・皇后両陛下が大正時代にお手植えの松などがあります。



⑨ 水門

この城は堀が海とつながっているの、潮の干潮による水位調節のため水門が設けられています。堀にはタイヤチスなど海の魚がいて、エサやり体験が楽しめます。



⑩ 鞆橋

本丸と二の丸を結んでいる唯一の連絡橋で、当初は欄干橋でしたが、江戸時代中期末頃にはこのような屋根付の橋になっていたようです。



水戸黄門と松平頼重

テレビドラマなどで有名な水戸黄門(徳川光圀)は初代藩主松平頼重の同腹の弟にあたります。松平頼重は、徳川家康第11男の水戸藩祖徳川頼房の長男として生まれながら、運命のいたずらから、次男である光圀が水戸徳川家を継ぐことになりました。光圀自身も次男である自分が兄を差し置いて水戸藩主となったことを悔やんで、自分の跡取りに頼重の子(綱条)を迎えて水戸藩主としました。一方、頼重も光圀の子(頼常)を高松藩主としました。以後、明治維新になるまで養子縁組を繰り返しました。

官休庵(武者小路千家)と松平家

高松松平藩と茶道千家のひとつ武者小路千家は、始祖千宗守が高松藩祖松平頼重に茶頭として仕えて以来、茶の湯を通じて今日も強く結ばれています。松平家が所有する楽焼茶碗「木守」は、千利休が作らせたもので、歴代の武者小路千家当主が「宗守」を襲名する披露茶会には必ず使用され、そのときには武者小路千家から松平家に、拝借の使者が立てられます。

松平家の泳法

高松藩祖松平頼重は高松城に入府すると「讃岐の国は海辺の国なれば水練は武道の一斑たるべし」と、藩士の今泉八郎左衛門に命じ、御船蔵西の堀溜(現JR高松駅構内)にて藩士に水練の指導をさせました。頼重自らも、入府の年の6月に城内の内堀で泳がれたとの記録もあります。
高松藩の水術は水戸藩の水術である水府流を源流とし、「高松御当所流」と呼ばれていましたが、やがて「水任流」が正式名称とされ、昭和53年4月に松平家第13代松平頼明氏を会長とした水任流保存会が結成され、毎年6月第1日曜日に英公(初代頼重の諡)を偲んで追悼游泳祭を行っています。また、松平頼明氏が水任流保存会を結成して日本泳法の保存に努め、水任流は昭和54年高松市無形文化財第1号に指定されたことの偉業を称え、二の丸北側(園外⑫)に水任流保存会初代会長松平頼明氏顕彰碑が建てられています。